

Abhidharmasamuccaya および その注釈 (*Vyākhyā*) の新出梵文写本について

李 学 竹

Abhidharmasamuccaya 『大乘阿毘達磨集論』(以下 AS) の梵文写本は、1930 年代、ラーフラ・サンクリトヤーヤナによってシャル寺の奥の院リプクで発見された。同氏は同写本を撮影し、その写真をもとにゴーカレーは AS を校訂し出版した¹⁾。写本は 17 枚の貝葉からなる未完本であり、葉番号は連続しておらず、冒頭と末尾を含む半分以上の貝葉が失われたと考えられてきた。しかるに近年、ポダラ宮およびノルブリンカ宮に所蔵される梵文写本についてその影印版を調査したところ、AS の欠損箇所の一部およびその注釈『大乘阿毘達磨雜集論』(*Vyākhyā*) の写本の存在を確認しえた。以下に紹介するのはその概要である。

1. 『大乘阿毘達磨集論』 *Abhidharmasamuccaya* の断片写本

AS 写本の原本はポダラ宮に所蔵され、その影印版は北京の中国蔵学研究中心の有する整理番号 100 と記されたカードボックスに保管されている。ボックスには、貝葉 185 枚分の梵文写本の影印が収められ、十数種類の作品が含まれるが、ほとんどが未完本の様である。その中には例えば、約 60 葉ほどの *Abhidharmadīpa-vibhāṣāprabhāvṛtti* の写本が含まれるが、ジャイニが校訂出版した箇所とは異なる部分を含む貴重なものである(佛教大学 松田和信先生のご助言による)。またプラマーナ関連の論典など興味深い写本が多く含まれ、全容の解明には更なる精査を要する。

AS の写本は同ボックスの最初に収録される。1980 年代にチベットの梵文写本を調査した羅炤氏の報告書「羅炤目録」²⁾ は、表紙貝葉の上端に記された一行を *Atrasthasūtrālaṃkaram subhūtim bhadraṣṭhita(sic.)* と読み、同写本を『大乘莊嚴經論』(12 葉) の「須菩提善住品」と記す。しかしこの一行は汚損が甚だしいため判読困難であり、また『大乘莊嚴經論』にはそのような品名は存在しない。一方、同表紙貝葉の中央に記されたチベット文字 (*mñon pa kun las btus kyi 'grel pa'i dum bu yin*) は、写本が AS の注釈書であることを示す。その下には *bal dpe* (ネパール写本) と

(154) *Abhidharmasamuccaya* およびその注釈(*Vyākhyā*)の新出梵文写本について (李)

ある。

これらの錯綜する情報を解明すべく筆者は、2009年に松田和信先生のご協力のもと同写本を再調査する機会を得、写本を解読した結果、それがAS本文の一部であることを確認するに至った。根拠となったのは第44葉の末尾の次の一節である。

kim upādāyedaṃ śāstram **abhidharmasamuccaya** ity ucyate / sametyoccatām upādāya samantād uccayatām upādāya samyagucca<ya>tvāyatanātām(*sic*) copādāya //

同写本は貝葉裏面の左端欄外に番号を付し、1, 15, 18, 20, 23, 27, 29, 33, 39, 43(半分欠損), 44(最終葉)の都合11枚が確認された。これらをラーフラが撮影したASの貝葉の写真と比較すると、書体および貝葉の形、大きさ及び紐穴などの形態が全同であり、上記の葉番号がラーフラの写真に欠けた部分に相当することがわかる。そのため新出の貝葉写本とラーフラの撮影した貝葉写本は、本来は同じ単一の写本に属していたことが分かる。残念ながら、新出の11枚と既知の17枚を合わせても、都合28枚にしかならず、本来44枚からなる写本全体のうちの16枚は未発見である。

2. 『大乘阿毘達磨雜集論』 *Abhidharmasamuccayavyākhyā* 写本 A

このたび上記のAS本論の確認に加え、ASの注釈(*Vyākhyā*)の写本2本がノルブリンカ宮に所蔵されることが確認された。

藏学研究中心所蔵の梵本影印版コレクションの作品一覧を記載する「桑徳目録」(No. 66, P. 49)は、「羅炤目録」に基づき、同写本をASと見なす³⁾。「羅炤目録」によると、写本は215枚あり第1葉以外は全部揃っているという。貝葉の大きさは31 x 5.4cm、片面は6行詰め、綺麗なプロト・ベンガリー書体で綴られる。しかしAS本論の写本としては同写本は枚数が過多であるため、筆者は羅炤氏の報告に疑問を抱き、ASの未知の注釈書である可能性を予想していた。その後2010年に、加納和雄氏(高野山大学)のご助力で調査する機会を得た。その結果、同写本がASの注釈書(*Vyākhyā*)、即ち玄奘訳『大乘阿毘達磨雜集論』に相当することが判明した(チベット訳は東北4054番)。奥書の後半には、写本が筆写された日付と文字数が記される。

parameśvaretyādirājāvalipūrvvat(*sic*) śrīmadana©pāladevasya vijayarājye samvat 13 āṣāḍhadine 7 granthapramāṇa śaḥasra(*sic*) 49....//

ここに現れるMadanapāla王の治世年代は1143/44~1161/62とされるため⁴⁾,

Abhidharmasamuccaya およびその注釈(*Vyākhyā*)の新出梵文写本について (李) (155)

写本の筆写年代は王の治世第 13 年目、即ち 1156/57 年となる。

写本は第一葉が欠損するが冒頭の帰敬偈の注釈箇所は半分程回収できる。本書は、AS 本論の文を引用してそこに注釈を施す体裁をとり、注釈部分は *Bhāṣya* と完全に一致する。慈恩大師基によると⁵⁾、『大乘阿毘達磨雜集論』(*Vyākhyā*) は本来独立して存在した無著の AS 本論と師子覚の注釈 (*Bhāṣya*) を安慧が適宜並べ直した、いわゆる「会本」とされ、実際の写本もその体裁をとる。玄奘訳『雜集論』も「安慧菩薩糅」と記し、会本であることを示唆する。このように従来断片的にしか知られてこなかった AS の本文は、この *Vyākhyā* のなかに織り込まれているため、それによって全文が回収できることとなる。

3. 『大乘阿毘達磨雜集論』 *Abhidharmasamuccayavyākhyā* 写本 B

本写本の影印版は蔵学研究中心のカードボックス 33 番に保管されている。羅炤氏によれば、ボックスには *Abhisamayālaṃkāra* など 4 種類の典籍が収納され、126 枚全てが蔵紙の写本という。本写本はその第 4 番にあり、羅炤氏は同定はしていないが、そこに現れる品名について次のように報告する。

1. 集諦 (*samudāyasatya*), 2. 滅諦 (*nirodhasatya*), 3. 諦抉択 (*satyaviniścaya*), 4. 説六波羅蜜多神通一切宝蔵, 説広大禪定 (*deśana(sic) vibhutvaṃ ṣaṣ(sic) pāramitāsarvākāradeśanāyāmadhyānataḥ(sic)*), 5. 法抉択 (*dharmaviniścaya*), 6. 論議抉択 (*sāṃkathyaviniścaya*) など。

一見したところ AS 関連文献である見通しがついたため、後日、上記の *Vyākhyā* 写本 A と読み合わせた結果、同写本を *Vyākhyā* の写本と同定するに至った。同写本 (B) は 84 枚からなり、全体の半分程度を欠く未完本である。各面は 6 行、ベンガリー書体で綴られる。写本右端欄外に番号を付すが、焼失破損した貝葉が多く、45 枚分の番号のみ確認できた。最初の番号は第 93 葉であり最後の番号は第 185 葉である。第 185 葉はその内容から判断すると失われた最終葉から数えて 4 枚目あたりに相当する⁶⁾。同写本は冒頭と末尾を欠くため年代や作者についての手がかりは得られない。

おわりに

以上、AS 本論の写本一本及び *Vyākhyā* の写本二本、都合三本の写本が確認された。*Vyākhyā* 写本 A は完本に近く、AS 写本と *Vyākhyā* 写本 B は全体の半分程を欠く未完本である。今回確認された AS の断片写本からは、従来知られていな

(156) *Abhidharmasamuccaya* およびその注釈(*Vyākhyā*)の新出梵文写本について (李)

い AS の梵文が新たに回収できる。そしてそれでもなお回収されない部分は、二本の *Vyākhyā* 写本から AS の本文を抽出し補うことによって、AS 本論の全文が得られることになる。現存する初期の大乗アビダルマ文献はその数が極めて少なく、また瑜伽行派の展開に多大な影響を与えた AS のサンスクリット原典が得られたことは、唯識思想研究の新たな展開に貢献できるものと期待される。

- 1) V. V. Gokhale, Fragments from the *Abhidharmasamuccaya* of Asaṅga. *JRAS*, Bombay Branch, New Series 23, 1947, pp.13–38.
- 2) 「羅炤目録」については、苦米地等流「理趣經（百五十頌般若經）の新出サンスクリット写本」（『高野山大学密教文化研究所紀要』第22号，2009年，316–300頁）314頁注7，およびルオ・ジャオ，松田和信〔訳〕，「海外ニュース チベット自治区に保存された梵文写本の目録編纂—その二十有余年の紆余曲折」（『佛教学セミナー』88, 128–117, 2008）を参照。
- 3) 「桑徳目録」については，ルオ・ジャオ（松田訳）論文を参照。
- 4) Susan L. Huntington, *The Pāla-Sena Schools of Sculpture. Studies in South Asian Culture*. Leiden: E. J. Brill, 1984. p. 70.
- 5) 窺基『阿毘達磨雜集論述記』「大聖無著具廣慧悲，集阿毗達磨經所有宗要，括瑜伽師地論一切法門，敘此本文，演斯妙義，覺師子稟承先訓，更為後釋，安慧閑其本末，參糅兩文」（正統藏48卷796番1頁下21）。
- 6) *Vyākhyā* 写本 B, fol. 185b6: dharmāyatanenāpi sa ity atra pūrvapādakaḥ / yo rūpāyatanena samanvāgataś cakṣurāyatanenāpi saḥ yo vā cakṣusā. 『大乘阿毘達磨雜集論』：「成就眼處亦法處耶，此亦應作順前句答。若成就色處亦眼處耶，設成就眼處亦色處耶」（大正藏31卷768頁上）。

〈キーワード〉 *Abhidharmasamuccaya*, 『雜集論』, Asaṅga, Sthiramati

（中国藏学研究中心副研究員，龍谷大学佛教文化研究所客員研究員）